

大井川鉄道 通称日本一短いトンネル

—そのフシギに迫る—

【取材現場】大井川鉄道(株)

【取材協力者】山本 豊福氏(大井川鉄道(株))

新連載「解き明かせ！フシギ構造物！—学生インフラ探偵団—」では、日常生活ではなかなか目にすることのないフシギな土木構造物取材することで、土木構造物に関する新たな発見や魅力をお伝えしていきます。第1回となる今回は、通称「日本一短いトンネル」(写真1)を取材し、建設の経緯や構造物の特徴について、大井川鉄道(株)様にお話をお伺いしました。

——通称「日本一短いトンネル」とは？

静岡県中部に位置する、静岡県榛原郡川根本町にあります。この構造物は大井川鉄道にあり、本線の地名駅じなから徒歩1分程でアクセスできます。通称「日本一短いトンネル」は、長さがおよそ11m、高さがおおよそ5mのコンクリート製の構造物で、その中をレトロな電車が通過します。外見はまさしくトンネルなのですが、実際はトンネルとは異なる土木構造物です。さらに、正確には「日本一短いトンネル」は他にあるという、まさにフシギな土木構造物なのです。

——なぜこのような構造物が建設されたのですか。

大井川は昔からダムや水力発電所の建設に適していると考えられ、明治

時代にはじめて大井川を利用した発電所が建設されました。大正時代に入り、さらなる電源開発を求められましたが、大量の建設資材を運搬するためには川のV字型の溪谷を避けるように

大回りする必要がありました。そこで、資材を効率よく運ぶために、大井川鉄道(株)が創立され、溪谷に沿って鉄道を建設する計画がされました。

大井川鉄道の建設が金谷駅から進んでいき、金谷—千頭間(図1)の一部が開通したところ、第二富士電力(株)



写真1 通称「日本一短いトンネル」

はロープウェイのように空中にロープを渡しリフトにより人や物資の輸送を行う設備である索道(図2)を、藤枝市滝沢—川根本町沢間に建設する計画を立てました。この索道は、さらなる電源開発を求めて建設された湯山発電所へ大量の資材を運ぶために

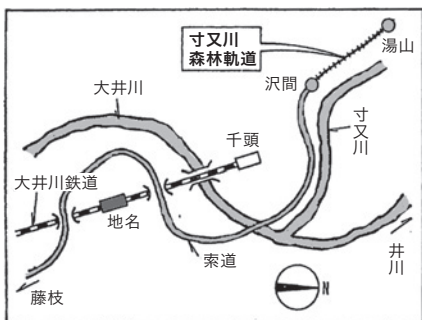


図2 索道開通後の地名駅周辺の地図



写真2 他方のトンネルに似た構造物

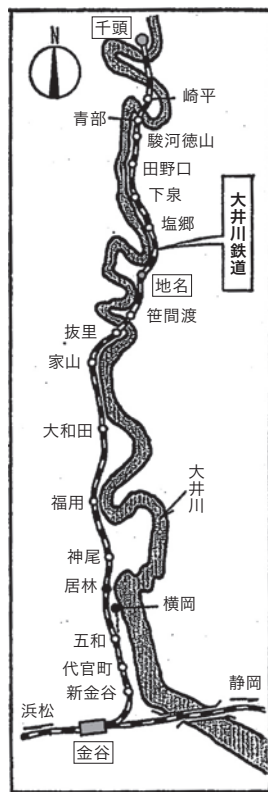


図1 大井川鉄道建設中の沿線地図

必要とされました。このような経緯により、大井川鉄道と索道の建設がほぼ同時期に進んでいったのです。

一方これらの建設当時、人や物資の輸送のため大井川には高瀬舟が通っており、地名駅周辺には高瀬舟の基地が存在していました。索道を通す際には、このような物流の拠点として重要な地域を経由する必要がありました。ところが、索道の建設が進められている最中に、金谷―千頭間の大井川鉄道が開通したため、この基地まで索道

を通すとなると、大井川鉄道の軌道上を通さなくてはなりませんでした。しかし、索道が鉄道の軌道上を通る場合、リフトから物が落下し鉄道の運行に支障がでることが想定されます。そこで、万が一の落下物があっても鉄道への影響を最小限にとどめられるように、鉄道の軌道と索道の交差部分に、第二富士電力(株)がトンネルのような土木構造物を建設しました。これが、通称「日本一短いトンネル」の正体なのです。後に索道は廃止されまし

たが、このトンネル風の構造物は撤去されませんでした。大井川鉄道としても、構造物を撤去するには手間や費用がかかるため、手を加えず現在の形で残しています。

—— 鉄道と索道の交差点は2力所あります(図2)、他方の構造物も現存していますか？

も、一方の構造物は、横の部分のみ現存しています（写真2）。時代の流れとともに蒸気機関車から電車に移行していく中で電気を通すための架線を設置するにあたり、トンネルの天井部分を取り払う必要がありました。そのため、よく見かけるコンクリート壁と変わらない見た目となっていました。

——通称「日本一短いトンネル」は、
今後もこのままの姿で維持されてい
くのですか。

現状、撤去する理由はないので取り壊す予定は全くありません。コンクリートの劣化等によって、鉄道の運行への影響がでてきた場合には検討するかもしれませんが、会社としても、この通称「日本一短いトンネル」の存在が話題となり、注目されることはありがたいことなので、より多くの方にこ

の構造物のことを知ってもらい、実際に見て楽しい気分になっていただけると嬉しいです。

取材を終えて……

ネルのようなフシギな構造物は、
今はない索道によって運ばれた荷
物が鉄道軌道へ落下する危険を
回避するために建設された構造物
でした。大井川鉄道と索道の建設
の歴史や、高瀬舟の拠点であった
地名駅の土地柄が大きく影響し
ていたことが分かりました。一つの
トンネルのような土木構造物に対
して、想像をはるかに超える壮大
な物語があり、取材をしながらま
すます興味が湧いてきました。構
造物には建設された意味がそれぞ
れあるため、日ごろからそれらを
考えることは勉強にもなり、なお
かつ楽しさにもつながっていると
感じました。

（担当編集委員…渡邊雅大、藤原茜）